

現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか？

五十嵐 陽 介

国立国語研究所

【要旨】 現代九州諸方言には、旧上二段動詞の未然・連用形末が母音 e を取り旧下二段動詞と統合する、いわゆる「下二段化」が観察される。九州・琉球祖語仮説によるとこの特質は、九州諸方言と琉球諸語がともに経験した音変化の結果であり、この音変化の共有によって九州諸方言と琉球諸語からなる単系統群が定義されるという。しかしながら「下二段化」は音変化ではなく類推変化の可能性が残されている。本稿は、九州諸方言の系統的位置の観点から現代九州諸方言の旧上二段動詞を分析することによって、九州・琉球祖語仮説の妥当性を検討した。その結果、この仮説を支持する証拠が宮崎県中部の方言に認められることを明らかにした。さらに、その他の現代九州諸方言も九州・琉球祖語の子孫とみなしうることを論じた*。

キーワード： 上二段活用, 九州方言, 琉球諸語, 日琉祖語, 類推

1. はじめに

現代九州諸方言における旧上二段動詞 (〈^お落つ〉〈^お下る〉〈^おく〉等) の活用パラダイムは極めて多様な様相を呈する (小林 1994, 迫野 1998a, 彦坂 2001, 黒木 2019)。本稿は、旧上二段動詞の未然・連用形末が母音 e を取り旧下二段動詞と統合する、いわゆる「下二段化」に着目する。服部 (1976) によるとこの特質は、九州諸方言と琉球諸語がともに経験した音変化の結果であり、この音変化の共有によって九州諸方言と琉球諸語からなる単系統群が定義されるという。本稿ではこの仮説を「九州・琉球祖語仮説」と呼ぶ。

しかしながら、旧上二段動詞の「下二段化」は音変化ではなく類推変化の結果である可能性が残されている (五十嵐 2021, Pellard 2021)。実際に、日本語方言学は現代九州諸方言の動詞パラダイムの様相を類推によるパラダイムの単純化の結果と

* 本研究は国立国語研究所第 4 期共同研究サブプロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」, および文科省科学研究費補助金基盤研究 (B) 「比較言語学的方法による日本語・琉球語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」(17H02332), 基盤研究 (C) 「日琉祖語の再建を目的とした同源性タグ・意味タグ付き語彙データベースの構築」(21K00517), 基盤研究 (A) 「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」(19H00530), 基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究」(21H04351) の助成を得て行われた。

みなしてきた（迫野 1998a, 彦坂 2001）。もしそれが類推変化の結果であるならば、服部四郎の九州・琉球祖語仮説はその根拠を失う。「下二段化」が音変化の結果なのか類推変化の結果なのかを明らかにするためには、日琉祖語（proto-Japonic, 八丈語を含む本土日本語諸方言と琉球諸語の共通祖語）における母音の区別を考慮して、現代九州諸方言の動詞活用パラダイムを検討する必要があるが、従来の研究ではそれが十分に行われていない。

本稿の目的は、現代九州諸方言の旧上二段動詞パラダイムに関する先行研究を九州諸方言の系統的位の観点から再検討することによって、九州・琉球祖語仮説を検証し、この仮説を支持する証拠を提出することにある。第2節では、現代九州諸方言における旧上二段動詞パラダイムの多様性を概観したのち、「下二段化」の説明に用いられる2つの対立する仮説、すなわち九州・琉球祖語仮説と類推仮説の全体像を提示し、九州・琉球祖語仮説を支持する決定的な証拠が何であるのかを明確にする。第3節では、九州・琉球祖語仮説の根幹をなす音変化がどのような事実に基づいて再建されるかを論じ、この仮説を支持する根拠として服部が挙げた証拠が不十分であることを指摘する。第4節では、九州・琉球祖語仮説を支持する証拠が宮崎県中部の諸方言に見つかることを示す。第5節では、その他の現代九州諸方言が九州・琉球祖語の子孫とみなしうるか否かを検討する。第6節では結論を述べる。

2. 背景

2.1. 現代九州諸方言における旧上二段動詞パラダイムの多様性

上代（奈良時代）の中央語（畿内の日本語方言）には、四段、上一段、上二段、下二段、カ変、サ変、ナ変、ラ変の8種類、中古（平安時代）の中央語にはこれに下一段（〈蹴る〉のみ）を加えた9種類の動詞活用パラダイムが存在していた（大西 2002, 坪井 2007）。以降、上代中央語と中古中央語を合わせて古代中央語と呼ぶ。不規則活用のカ変、サ変、ラ変、ナ変を除くと、上代中央語の活用パラダイムは表1のように要約できる。母音に付された数字は上代中央語の書記体系における母音の甲乙（1 = 甲類, 2 = 乙類）を表す。すべての活用形が文献に在証されるわけではない。

表1 上代中央語の動詞活用パラダイム（坪井 2007, 早田 2017 を参考に作成）。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段 ^あ 〈開く〉	aka	aki ₁	aku	aku	ake ₂	ake ₁
上一段 ^き 〈着る〉	ki ₁	ki ₁	ki ₁ ru	ki ₁ ru	ki ₁ re	ki ₁ jo ₂
上二段 ^お 〈起く〉	oki ₂	oki ₂	oku	okuru	okure	oki ₂ jo ₂
下二段 ^う 〈受く〉	uke ₂	uke ₂	uku	ukuru	ukure	uke ₂ jo ₂

古代中央語の活用パラダイムは、不規則活用を除くと、活用が母音交替によってのみ表される四段活用と、母音交替に加えて接辞（-ru, -re, -jo₂）の付加の有無によっ

て活用が示される二段活用，接辞の付加の有無にのみよって活用が示される一段動詞に分類できる（日本語学会（編）2018: 151）。本稿では二段活用と一段活用の動詞について，未然・連用形の末尾母音および連体・已然・命令形における接辞の直前の母音を語幹末音と呼ぶ。一段活用は，語幹末音が $i_{(1)}$ である上一段活用と，それが e である下一段活用（中古中央語）とに分類される。二段活用は，未然・連用・命令形語幹末音が $i_{(2)}$ である上二段活用と，それが $e_{(2)}$ である下二段活用とに分類される。

本稿では，ある現代方言における動詞の古代中央語における活用型を問題とするとき，「旧 X 動詞」という表現を用いる。これは当該の動詞が古代中央語において X 活用に属することを意味する。例えば「旧上二段動詞」とは，その動詞が現代諸方言でどのように活用するかにかかわらず，古代中央語において上二段活用することを意味する。さらに本稿では，諸方言において様々な音形をとる動詞が同源であることを示すために表記“〈X〉”を用いる。X には古代中央語の終止形を漢字と仮名で与える。例えば未然形 *ori* 「下り」，*oje* 「下り」，*oi* 「下り」等に“〈下る〉”が与えられた時，これらが同源であり，古代中央語の *ori* 「下り」に対応することが表される。したがって本稿では，ある現代方言において未然・連用形 *ore* 「下り」，終止・連体形 *oruru* 「下りる」という活用を行う動詞があった場合，「この方言では旧上二段動詞〈下る〉が下二段活用する」と表現される。

古代中央語のパラダイムをすべて保持している現代方言は知られていない（大西 2002）。現代九州諸方言も例外ではなく，パラダイムの数を減らしているが，パラダイムに生じた変化が方言ごとに異なる。そのためパラダイムに極めて多様な方言差が観察される（小林 1994，迫野 1998a，彦坂 2001）。その方言差は特に旧上二段動詞に観察される（迫野 1998a）。例えば大分県旧野津町方言では旧上二段動詞〈起く〉が下二段活用し，〈開く〉等の属する旧下二段動詞と統合している（表 2）。日本語方言学ではこの特質は「下二段化」と呼ばれる（迫野 1998a，彦坂 2001）。鹿児島市方言では〈起く〉が〈取る〉等の属する旧四段動詞と統合している（表 3）。この特質は「ラ行五段化」と呼ばれる（迫野 1998a，彦坂 2001）。長崎市方言（平山他（編）1992-93）では〈起く〉の語幹末音が u と交替しない（表 4）。この特質は「一段化」と呼ばれる（迫野 1998a）。さらに大分県九重町方言のように〈起く〉を含む旧上二段動詞のほとんどが上二段活用し，他とは統合していない方言もある（表 5）。

表 2 大分県旧野津町方言の動詞活用パラダイム（平山他（編）1992-93）

	未然形（否定）	連用形（過去）	終止・連体形
〈起く〉（旧上二段）	oken	oketa	okuru
〈開く〉（旧下二段）	aken	aketa	akuru
〈見る〉（旧上一段）	miran	mita	miru
〈取る〉（旧四段）	toran	totta	toru

表3 鹿児島市方言の動詞活用パラダイム (平山他 (編) 1992-93)

	未然形 (否定)	連用形 (過去)	終止・連体形
〈 ^お 起く〉 (旧上二段)	okiran	okitta	oki?
〈 ^あ 開く〉 (旧下二段)	aken	aketa	aku?
〈 ^み 見る〉 (旧上一段)	miran	mita	mi?
〈 ^と 取る〉 (旧四段)	toran	totta	to?

表4 長崎市方言の動詞活用パラダイム (平山他 (編) 1992-93)

	未然形 (否定)	連用形 (過去)	終止・連体形
〈 ^お 起く〉 (旧上二段)	okin	okita	okiru
〈 ^あ 開く〉 (旧下二段)	aken	aketa	akuru
〈 ^み 見る〉 (旧上一段)	miran	mita	mi?
〈 ^と 取る〉 (旧四段)	toran	totta	to?

表5 大分県九重町方言の動詞活用パラダイム (糸井 1964)

	未然形 (否定)	連用形 (過去)	終止・連体形
〈 ^お 起く〉 (旧上二段)	okin	okita	okuru
〈 ^う 受く〉 (旧下二段)	uken	uketa	ukuru
〈 ^み 見る〉 (旧上一段)	min	mita	miru
〈 ^と 取る〉 (旧四段)	toran	totta	toru

本稿が着目するのは「下二段化」であるが、『方言文法全国地図』(GAJ 1989-2006) 第72図「起きない」から、^お起く〉の「下二段化」の九州における分布を知ることができる(図1)。^お起く〉がその未然形末にeを取ることで旧下二段動詞と統合している方言は、九州東部に広範に認められるだけでなく、壱岐、対馬、天草諸島、トカラ列島という地理的周辺部にも認められ、不連続な形で分布している。

2.2. 現代九州諸方言における「下二段化」の発生時期と発生要因

このようなパラダイムの多様化はいつ、どのような要因で生じたのであろうか。後述するように、多様化が開始される起点を古代中央語に置くか、それ以前の体系に置くかによって、パラダイム変化の発生要因として何が想定されるかが異なってくる。

諸方言の動詞活用パラダイムを「下二段化」、「一段化」、「ラ行五段化」等の用語を用いて記述する日本語方言学(小林 1994, 迫野 1998a, 彦坂 2001)は、これらの用語が暗示するように、動詞パラダイムの方言差を古代中央語を起点とした通時変化の結果であるとみなす。このような見解の背後には、すべての日本語諸方言は古代中央語から分岐したとする暗黙の前提がある。この前提に立つ限り、現代九州

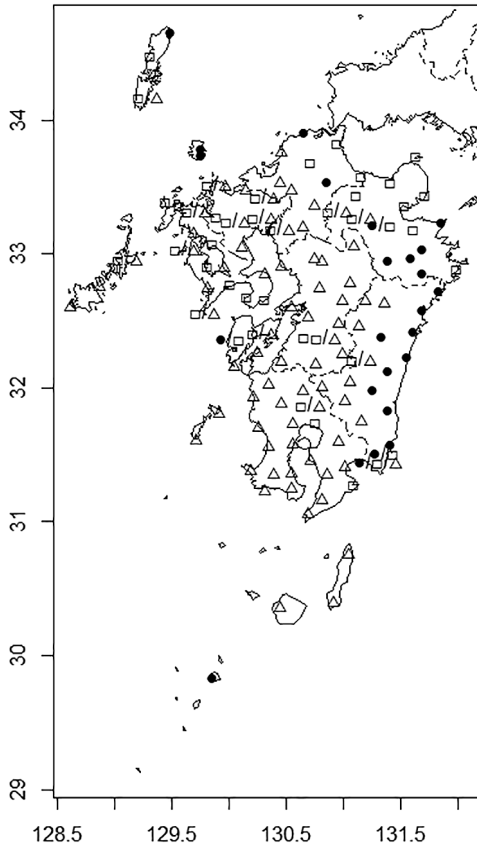


図1 〈起く〉の未然形の分布 (● oke, □ oki, △ okir) GAJ (1989-2006) に基づき作成。

諸方言の持つ非古代中央語的特質はいかなるものであれ、上代（8世紀）以降に発生した新しい特質とみなされる。たしかに「ラ行五段化」は近世末期に発生した極めて新しい特質であることを示唆する証拠が朝鮮資料やロシア資料に見つかるといふ（彦坂 2001）。しかし「下二段化」の発生時期が上代以降であることを示す文献上の証拠は筆者の知る限り提示されていない。これを上代以降とみなす日本語方言学の見解は、九州諸方言の分岐に関する暗黙の前提からの演繹的推論に過ぎない。

変化の起点を古代中央語に置く日本語方言学は「下二段化」の発生要因を類推とみなす（迫野 1998a, 彦坂 2001）。類推仮説によれば「下二段化」は、所属動詞の数が少ない旧上二段動詞が数の多い旧下二段動詞へ統合した結果である¹。類推変化

¹ 迫野（1998a: 76）は旧上二段動詞が旧下二段あるいは旧五段動詞に統合していることについて「相対的に力の弱い上二段が他の優勢な類に類推統合して活用システムの「単純化」を果

では、音変化とは異なり、必要な条件を備えた古い形式のすべてが一斉に新しい形式に置き換わるのではなく、一度に1項目ずつ置き換わり、パラダイム内に古い形式を一部残す場合がほとんどである (Bybee 2015)。実際に、「下二段化」の認められる諸方言は必ずしも旧上二段動詞のすべてを下二段活用させるとは限らず、どの動詞が「下二段化」するかは方言ごとに異なる (第5節参照)。このような様相は類推仮説を支持するように一見思われる。

一方、類推仮説の仮定とは異なり、上代中央語の分岐以前に九州諸方言を含む系統群が分岐したと仮定するならば、「下二段化」が上代より前の時代にまで遡る可能性を検討する必要性が生じ、それにともない、類推以外の要因が「下二段化」を生じた可能性を検討する必要性が生じる。服部 (1976) はまさにこの可能性を探求した先駆的研究である。

服部 (1976, 1978) によると、日琉祖語の活用パラダイムに係る音の区別の一部を上代中央語はすでに失っている。第3節で詳述するように服部は、上代中央語の内的再建と上代中央語と琉球諸語との比較に基づいて、旧上二段動詞の語幹末に2種類の母音、*ui と *i を再建する (1) (* は再建形を表す)。本稿では *ui を語幹末に持つ動詞 (<過ぐ> <尽く> 等) を U 類、*i を語幹末に持つ動詞 (<落つ> <起く> 等) を M 類と呼ぶ。

(1) 日琉祖語における旧上二段動詞の2種類の語幹末母音

- a. U 類: <過^すぐ> *sugui <尽^つく> *tukui
 b. M 類: <落^おつ> *otai <起^おく> *akai

服部によると、上代中央語では音変化 (*ui > i2, *i > i2) によって2種類の母音が合流したため、U 類と M 類はその区別を失い、旧上二段動詞に統合したという。(“X > Y” は “X から Y への変化” を表す。) それに対して琉球祖語では2種類の母音がそれぞれ異なる音変化 (*ui > *i, *i > *e) を経験したため、U 類と M 類の区別が保持される一方で、M 類が旧下二段動詞に統合したという (服部 1976, 1978)。

現代九州諸方言に観察される旧上二段動詞の「下二段化」は、上代中央語が失った U 類と M 類の区別の反映である可能性がある。もしそうであるならば、「下二段化」の発生年代は上代より前に遡ることになり、その発生要因は類推ではなく音変化ということになる。実際に、服部 (1976) はそのような仮説を提出している。服部は現代九州諸方言の一部における旧上二段動詞の旧下二段動詞への統合を音変化 *i > e の結果であると解釈する。さらに服部は琉球諸語と九州諸方言とが問題の音変化を共有しているとみなしうることから、九州・琉球祖語仮説を提唱している。

たしたものであるように見るべきではないかと思われる」と述べ、「下二段化」が類推変化の結果とする立場を明確にしている。

2.3. 九州・琉球祖語仮説の予測と類推仮説の予測

服部の仮説は、現代九州諸方言における旧上二段動詞パラダイムの多様性を巡る問題の一部を日琉祖語の母音に生じた音変化によって説明するものであり、この問題が九州諸方言の系統に関わりうることを示した点で極めて重要である。九州諸方言と琉球諸語との系統的近縁性は主として語彙・文法の共通性の観点から検討が重ねられてきたが（伊波 1911, 野原 1979-83, 五十嵐 2018, 2021, Jarosz 2019, 狩俣 2020）、両者の近縁性を比較言語学的観点から検討し、その証拠を音変化の共有に求めた研究は服部（1976）を措いて他にない。それにもかかわらず服部以降の研究はごく一部の例外（Serafim 2003, 五十嵐 2021）を除いて、現代九州諸方言の旧上二段動詞パラダイムを上代以降に生じた類推変化の結果と解釈してきた。

一方、服部（1976）には類推変化の可能性を一切考慮していないという重大な問題がある。九州・琉球祖語仮説を支持する決定的な証拠は、U類とM類が区別され、かつM類が旧下二段動詞と統合している現代九州方言の存在である。しかし奇妙なことに服部は現代九州諸方言を検討する際にU類とM類の区別を念頭に置いていない。

対立する2つの仮説、すなわち九州・琉球祖語仮説と類推仮説とを（2-3）に要約しよう。2つの仮説は想定される変化の起点とその発生要因とにおいて異なる。九州・琉球祖語仮説（2）は、U類とM類の区別された日琉祖語の体系を変化の起点に置き、音変化を発生要因とみなす。それに対して類推仮説（3）ではU類とM類の区別のない古代中央語の体系を変化の起点に置き、旧上二段動詞の旧下二段動詞への類推を発生要因とみなす。

(2) 九州・琉球祖語仮説

	日琉祖語	[音変化]	九州・琉球祖語
U類〈 ^す 過ぐ〉	*sugui	*ui > *i	*sugi
M類〈 ^お 起く〉	*əkai	*ai > *e	*oke
旧下二段〈 ^う 受く〉	*ukai	*ai > *e	*uke

(3) 類推仮説

	古代中央語	[類推変化]	現代九州方言
U類〈 ^す 過ぐ〉	sugi(2)	>	suge
M類〈 ^お 起く〉	oki(2)	>	oke
旧下二段〈 ^う 受く〉	uke(2)	=	uke

2つの仮説は現代九州諸方言の旧上二段動詞のパラダイムに関して異なる予測を生む。すなわち、九州・琉球祖語仮説はU類とM類が区別され、M類が旧下二段

動詞と統合した体系の存在を予測するのに対して、類推仮説はそれを予測しない。前述の通り、類推は条件を備えたパラダイムのすべてに影響を与えるとは限らないので、一部の旧上二段動詞が旧下二段動詞と統合しない状態は類推仮説の予測の範囲内である。しかし、旧下二段動詞と統合しない旧上二段動詞がU類と一致する方言が見つかった場合、類推仮説ではそれを偶然とみなさざるを得ない。それに対して九州・琉球祖語仮説ではその状態こそが仮説の予測と一致する。したがって、M類が旧下二段動詞と統合するがU類はそうではない現代九州方言は九州・琉球祖語仮説を支持する決定的な証拠となる。

3. 旧上二段動詞 U類と M類の再建と九州・琉球祖語仮説

3.1. *ui, *ɔi の再建

服部の九州・琉球祖語仮説では、日琉祖語の母音 *ɔi に生じた音変化 *ɔi > *e を九州諸方言と琉球諸語とが共有しているとされる。日琉祖語の母音 *ɔi とそれに生じた音変化 *ɔi > *e はどのような事実に基づいて再建されるのであろうか。

上代中央語の *i*₂ には、露出形と被覆形（有坂 1931）の対や自動詞と他動詞の対などの語源の共通する語根の対（*tuki*₂「月」～*tukujō*₁「月夜」、*ki*₂「木」～*ko₂no₂pa*「木の葉」等）において、*u* と交替するものと *o*₂ と交替するものの2種類がある²。服部（1978）はこの事実に着目し、上代中央語の *i*₂ に反映される母音として日琉祖語に2種類の二重母音を再建する。すなわち、*u* と交替する *i*₂ に対応する **ui*（4a）と³、*o*₂ と交替する *i*₂ に対応する **ɔi*（4b）である。服部（1978）はまた、*e*₂ が語源の共通する語根の対において *a* と交替することに着目し、上代中央語で *e*₂ に反映される母音として日琉祖語に **ai* を再建する（4c）。

- | | | |
|------------|--------------------------|---------------------------------------|
| (4) a. *ui | 都奇「月」（万葉集 4060） | ～ 都久欲「月夜」（万葉集 4489） |
| | <i>tuki</i> ₂ | <i>tukujō</i> ₁ |
| | 俱基「茎」（歌経標式） | ～ 九久多知「茎立」（万葉集 3406） |
| | <i>kuki</i> ₂ | <i>kukutati</i> |
| | 迦微「神」（古事記 2） | ～ 加牟加是「神風」（古事記 13） |
| | <i>kami</i> ₂ | <i>kamukaze</i> |
| | 須疑「過ぎ」（万葉集 4463） | ～ 須具之「過ごし」（万葉集 4318） |
| | <i>sugi</i> ₂ | <i>sugusi</i> |
| b. *ɔi | 紀「木」（万葉集 812） | ～ 訶能波「木の葉」（古事記 20） |
| | <i>ki</i> ₂ | <i>ko₂no₂pa</i> |

² 上代中央語の語形は上代辞（1967）と ONCOJ（2021）に基づく。

³ 服部が **ui* を再建する語の一部に **oi* を再建する枠組みがある（Vovin 2011; Pellard 2013）。この枠組みでは本稿の U類の一部に **oi* を再建する。**ui* と **oi* の区別は本稿の主旨に関わらないので、本稿は服部（1976）に倣い、両者を **ui* として扱う。

	於己「起き」(日本書紀 83)	~	於許之「起こし」(万葉集 4164)
	oki ₂		ok ₂ si
c. *ai	左気「酒」(万葉集 852)	~	佐加豆岐「盃」(万葉集 840)
	sake ₂		sak ₂ duki ₁
	多気「竹」(万葉集 824)	~	太加無奈「筍」(新撰字鏡)
	take ₂		tak ₂ muna
	阿宜「上げ」(古事記 55)	~	安我里「上がり」(万葉集 4292)
	age ₂ te		ag ₂ ri

*ui と *ai の再建は上代中央語と琉球諸語⁴との比較によっても支持される(服部 1976, Pellard 2013)。表 6 に示すように琉球諸語では, *ui と *ai とはそれぞれ異なる反映を示し, 後者は *ai と合流する。今帰仁方言, 伊江方言, 首里方言では祖語の母音の区別は共時的な母音に反映されないが, その直前の子音に反映される。具体的には, *ui の直前の子音には口蓋化(および破擦化)が認められるのに対して, *ai の直前の子音にはそれが認められない。(今帰仁方言と伊江方言の喉頭化・帯気化は, 少なくとも本稿が例示する語に関しては, *ui と *ai, *ai との区別に関わらない。)大和浜方言では特定の環境を除いて *ui は i に反映され, *ai と *ai は i に反映される。*sake では母音間の *k の摩擦化と, この子音を挟む母音に生じた双方向的な同化により, 問題の母音が₃に反映される⁵。多良間方言, 伊良部方言, 石垣

⁴ 本稿の琉球諸語のデータは以下の文献による。大和浜: 長田・須山・藤井(1980), 今帰仁: 仲宗根(1983), 首里: 国立国語研究所(編)(2001), 多良間: 渡久山・セリック(2020), 伊良部: 富浜(2013), 石垣: 宮城(2003), 竹富: 前新(2011)。音声表記は国際音声記号の体系に改めた。ただし“ ”は喉頭化を表す。

⁵ 表 6 の大和浜方言に再建される音変化とその根拠について論じるように査読者から求められたので, 琉球祖語(pR)*sake「酒」とpR*oke「起き」の音変化に焦点を置いてこれを行う。日琉祖語(pj)の母音*ai は, 大和浜方言では特定の音環境を除いて i に反映される(pj *amai「雨」> 上代中央語 ame₂ ~ ama :: 大和浜 ami)。この事実に基づいて, pj *ai が pR で *e に変化した後に大和浜方言に生じた音変化として**狭母音化**(*e > *i)が再建できる。pR *e の狭母音化は pR *kame「亀」> k^hami, pR *pune「船」> huni, pR *ke「毛」> k^hi など確認できる。一方, 特定の音環境では pR *e が i 以外の母音に反映される。この事実は狭母音化の後に更なる音変化が生じた結果と解釈できる。問題の音環境には pR *sake「酒」の *e が置かれた環境が含まれる。この語における *e の変化には pR *k の条件変化が関わる。大和浜方言において, pR *k は狭母音の前では k' に反映されるのに対して (pR *kinu「衣」> k'in, pR *kuti「口」> k'utz'i, pR *saki「先」> sak'i), 非狭母音の前では特定の音環境を除いて k に反映される (pR *kane「金」> k^hani, pR *kome「米」> k^humi, pR *mukasi「昔」> mok^haci)。この事実に基づいて**喉頭化**(*k > *k' / # _ *V_[-high])と**帯気化**(*k > *k^h / _ *V_[-high])という2つの音変化が再建できる(Vは母音を表す)。喉頭化と帯気化は, pR の母音の開口度に依存するので, pR の非狭母音 *e を狭母音 *i に変化させる狭母音化に年代的に先行する。非狭母音の *k が k^h に反映されない特定の音環境の1つは, *k が非狭母音に挟まれる環境である。この環境では *k は h に反映される (pR *naka「中」> naha, *woke「桶」> wihi, pR *take「丈」> t^hah₃, pR *tako「蛸」> t^hoho, pR *moko「婿」> muhu)。この事実に基づいて *k を h にする音変化である**摩擦化**(*k^h > h / *V_[-high] _ *V_[-high])が再建される。この変化の音声学的基盤は, 隣接母音調音時の開いた口腔が子音調音時の口腔内の狭窄を弱体化させる機序に求められる。摩擦化も pR の母音の開口度に依存するので, 狭母音化に年代的に先行する。帯気化と摩擦化の相対年代については, 帯気化に摩擦化が後

方言では *ui は η あるいは i に反映され, * $\ddot{a}i$ と *ai は i に反映される。ただしこの3方言を含む南琉球諸語では琉球祖語の段階で存在した M 類と U 類の区別が類推によって消失しているため, *ui と * $\ddot{a}i$ の区別は名詞のみに認められる (Pellard 2013) (5.2 節参照)。

続するとみなした方が音声学的に妥当であろう。音韻素性 (e.g. Spencer 1996) を用いれば、帯気音化は喉頭素性の1つである拡張声門性 [+spread glottis] が子音に指定される過程であり、摩擦化は子音が [+spread glottis] を維持したまま口腔内の調音に関わる素性を失う過程と説明される。したがって摩擦化は年代的に帯気化と狭母音化の間に配置される。大和浜に再建された4つの音変化とその相対年代に従えば、pR *sake 「酒」 > *sak^he (帯気化) > *sahe (摩擦化) > *sahi (狭母音化) という変化の過程が再建される。しかし実際の在証形は sah₃ であるので、更なる音変化を再建しなければならない。sah₃ 「酒」に認められる共時的な音連鎖 $\ddot{a}C_3$ (C は子音) は、pR の音連鎖 *ake にのみに遡り (pR *take 「丈」 > t^hah₃, pR *take 「竹」 > dh₃, pR *make- 「負け」 > m^hah₃-, pR *kake- 「欠け」 > k^hah₃-), また C は必ず h である。この事実に基づいて、h を跨いだ母音融合を摩擦化の後に再建することができる。この母音融合の年代は狭母音化の後でなければならない。なぜならば狭母音化する前の *sahe に母音融合が生じ *sehe となった後に狭母音化が生じたとする仮説は、存在しない[†] sihi を予測するためである。したがって h を跨いだ**母音融合** (*ahi > ah₃) が、摩擦化および狭母音化の後に再建される。この母音融合は、融合後の母音の開口度が融合前の先行母音と後続母音の中間となる双方向的な同化現象と説明できる。音韻素性を用いれば、[± low] が右から左へ、[± high] が左から右へと、h を跨いで波及する過程と説明される。すなわち、後続母音 * \ddot{a} [-low, +high] の [-low] が先行母音 *a [+low, -high] に波及することにより先行母音が \ddot{a} [-low, -high] となり、先行母音 *a [+low, -high] の [-high] が後続母音 * \ddot{a} [-low, +high] に波及することにより後続母音が \ddot{a} [-low, -high] となった結果と説明される。pR *woke 「桶」 > wihi や pR *tako 「蛸」 > t^hoho からも類似の母音融合 (*uhi > ihi, *ahu > oho) が再建できることが示唆されるが、これについては詳述しない。h を跨いだ母音融合は黒島方言などにも観察される (Lawrence 2000; 原田 2016)。Lawrence (2000) は、これらの方言において h が母音融合に関して透過的なのは、この子音が口腔内の調音に関わる素性を欠いているためであると説明する。以上から、pR *sake 「酒」 > *sak^he (帯気化) > *sahe (摩擦化) > *sahi (狭母音化) > sah₃ (母音融合) という変化の過程が再建できる。続いて、pR *oke 「起き」 > ϕ * \ddot{a} i:(r) の変化を論じよう。この語も帯気化、摩擦化、狭母音化をこの順序で経験していると解釈できるが (pR *oke > *ok^he (帯気化) > *ohe (摩擦化) > *uhi (狭母音化)), ϕ * \ddot{a} i: に至るまでには更なる変化を再建する必要がある。その変化として、h の直前に位置する語頭母音を無声音にする**無声化** (*V > *V[-voice] / # *h) と、語頭無声母音と h の組み合わせを頭子音に h を伴う母音として再分析する**音位転倒** (*V[-voice] h > *hV / #) とが、この順序で再建される。前者は有声性 [± voice] の同化現象であり、後者は無声化母音と無声声門摩擦音を知覚上区別することが困難であることに起因する音位転倒 (Bybee 2015: 3.7.2 節) とみなすことができるので、双方とも音声学的基盤を持つ。これらの音変化によって *uhi ((pR *oke 「起き」) は *uhi を経て *hui へと変化する。語頭母音の無声化および音位転倒は pR *aka 「赤」 > ha: でも確認できる (pR *aka > *aha > *aha > ha:)。類似の語頭母音の無声化は、後続母音が h に限らずすべての無声子音である点、アクセントに関わる点が異なるが、今帰仁方言 (仲宗根 1983: 634) にも観察される。表6の今帰仁 ϕ uk'ir- 「起き」の語頭子音は語頭母音の無声化の結果である。大和浜方言の *hui にさらに *ui > *wi: (渡り音化) と *h > ϕ / _w (調音位置の同化) とが生じれば、在証形の ϕ * \ddot{a} i: 「起き」が得られることになる。

表6 *ui, *ɔi, *ai の上代中央語と琉球諸語との対応

	*ui		*ɔi		*ai	
	「月」	「過ぎ」	「木」	「起き」	「酒」	「上げ」
上代中央語	tuki ₂	sugi ₂	ki ₂	oki ₂	sake ₂	age ₂
大和浜	tz'ik'i	siɣi-r-	kʰi:	ɸʷi:r-	sɔhɔ	?aɣi-r-
今帰仁	ɕitɕ'i:	ɕidzi:r-	kʰi:	ɸuk'i-r-	sak'i:	?aɣi:r-
伊江	sitɕ'i:	sizir-/sig-	kʰi:	?uk'i-r-	sak'i	?aɣi-r-
首里	tɕitɕi	sidzi-r-	ki:	?ukir-	saki	?aɣi-r-
多良間	tsɣkɣ	sɣgi-	ki:	uki-	ɕaki	agi-
伊良部	tsitsi	siɣi-	ki:	ɸki-	saki	agi-
石垣	tsiki	siɣi-	ki:	uki-	saki	agi-
琉球祖語	*tuki	*sugi	*ke	*oke	*sake	*age

これらの事実に基づいて服部（1976）は、*ui, *ɔi, *ai に生じた音変化として、上代中央語と琉球祖語とにそれぞれ（5）を再建する。

- (5) a. 上代中央語 *ui > i₂ *ɔi > i₂ *ai > e₂
 b. 琉球祖語 *ui > *i *ɔi > *e *ai > *e

3.2. 旧上二段動詞 U 類と M 類

*ui と *ɔi をそれぞれ含む語に旧上二段動詞（〈[†]過ぐ〉〈^お起く〉）が含まれていることから明らかのように、上代中央語の上二段動詞の未然・連用形語幹末音は等しく i₂ であるが、日琉祖語まで遡ると *ui を持つものと *ɔi を持つものとが区別される。言い換えれば上代中央語の旧上二段動詞には、日琉祖語において語幹末母音に *ui を持つ動詞（〈[†]過ぐ〉等）と *ɔi を持つ動詞（〈^お起く〉等）とが混在している。Serafim（2003）は前者のパラダイムを upper bigrade（上二段）、後者のパラダイムを middle bigrade（中二段）と呼ぶが、この用語法を採用すると「上二段」が二義的に用いられることになるので、本稿ではこれを避け、前者を U 類、後者を M 類と呼んでいる（1）。

表7に示すように、*ɔi に生じた音変化が上代中央語と琉球祖語とで異なることは、両言語の動詞パラダイムの形成に異なる影響を与えることになる。上代中央語では *ui と *ɔi の合流によって日琉祖語の U 類と M 類が旧上二段動詞に統合する。それに対して琉球祖語では *ui と *ɔi にそれぞれ異なる音変化が生じることによって母音の区別が保たれ、U 類と M 類の区別が保たれる。ただし琉球祖語では音変化 *ɔi > *e, *ai > *e によって日琉祖語の *ɔi と *ai が合流したため、*ɔi を含む M 類と *ai を含む旧下二段動詞とが統合する（服部 1978）。

表7 上代中央語と琉球祖語におけるU類, M類, 旧下二段動詞の統合

日琉祖語		上代中央語		琉球祖語
U類〈過ぐ〉	*sugui	旧上二段	sugi ₂	*sugi
M類〈起く〉	*əkai		oki ₂	*oke
旧下二段〈上ぐ〉	*agai	旧下二段	age ₂	*age

琉球祖語におけるパラダイムの様相は、類推による旧上二段動詞の旧下二段動詞への統合の結果と解釈することはできない。なぜなら類推仮説は、旧下二段動詞へ統合しない旧上二段動詞がなぜU類と一致するかを説明できないからである。それに対して服部説は、問題の事実を日琉祖語で区別されていた母音に生じた音変化の結果と説明することができる。

3.3. U類とM類の再建

3.3節ではU類の例として〈過ぐ〉, M類の例として〈起く〉を挙げたが、他の旧上二段動詞はどのようにU類とM類とに分類されるのであろうか。前述の通りU類は、日琉祖語において末尾に母音*uiを持つ動詞であり、*uiは上代中央語における*i*₂と*o*₂の母音交替, および上代中央語の*i*₂と琉球祖語の**i*との対応に基づいて再建される。それに対してM類は、日琉祖語において末尾に**ai*を持つ動詞であり、**ai*は上代中央語における*i*₂と*o*₂の母音交替, および上代中央語*i*₂と琉球祖語の**e*との対応に基づいて再建される。

他の旧上二段動詞をU類とM類とに分類するためには、このような内的再建と比較再建の手法をそれらに適用する必要があるが、これは必ずしも容易ではない。第1に、内的再建と比較再建を行うに十分な証拠がすべての旧上二段動詞に存在しているとは限らない。例えば、上代中央語の旧上二段動詞の母音交替のすべてが文献に記録されるとは限らない。第2に、現代九州諸方言に継承された旧上二段動詞は、そもそも数が少ない旧上二段動詞の一部に過ぎない。これについて原田(1953)は、熊本県の諸方言において〈朽つ〉〈尽く〉〈怖づ〉〈攀づ〉は「方言語彙とはいえない存在である」(p. 136)と述べており、糸井(1959)は大分県旧野津町西神野方言について、〈恥づ〉〈攀づ〉〈生ふ〉〈帯ぶ〉〈恋ふ〉〈媚ぶ〉〈滅ぶ〉〈侘ぶ〉〈老ゆ〉〈梅ゆ〉〈報ゆ〉は「日常的に聞かれないらしい」(p. 83)と述べている。実際に、先行研究(服部1976, Pellard 2013)がU類に分類する〈尽く〉は現代九州諸方言に確認できない。

九州諸方言の動詞活用パラダイムを記述する先行研究は、それぞれのパラダイムに属する動詞の代表を挙げるにとどまるのが普通であり、任意の動詞がどのパラダイムに属するかを包括的に記述することはまれである。そのため、どの旧上二段動詞が現代九州諸方言に広く継承されているのかを知ることが難しい。しかし、先行研究の多くが旧上二段動詞として記述する動詞は何かを検討することで、現代九州諸方言に広く継承された旧上二段動詞を間接的に知ることができる。筆者の調査

によるとそれらは〈出来〉〈落つ〉〈下る〉〈起く〉であり、一部の研究ではこれらに〈生ふ〉〈過ぐ〉〈生く〉が加わる。このうち〈出来〉は〈出づ〉と旧カ変動詞〈来〉からなる複合動詞であり、上代中央語には在証されないが、中古中央語にカ変動詞として在証される（日国 2000-02）。この動詞は後世に語源意識が失われ上二段動詞に変化したとされる（日国 2000-02）⁶。以上から本稿では〈出来〉を旧上二段動詞とみなさず、〈落つ〉〈下る〉〈起く〉〈生ふ〉〈過ぐ〉〈生く〉の6つを現代九州諸方言に広く継承された旧上二段動詞とみなし、これらをU類・M類へ分類することを試みる。

6つの動詞のうち先行研究がU類に分類するものは〈過ぐ〉であるが（服部 1976, Pellard 2013）、本稿はこれに〈生く〉を加えることを提案する。上二段活用の〈生く〉は上代中央語には在証されず、代わりに四段活用の〈生く〉（五十寸手 *ikiute* 「生きて」(万葉集 2904)、伊家流 *ikeiru* 「生きた」(万葉集 4170)）が在証される（上代辞 1967: 69）。中央語における旧上二段動詞〈生く〉は平安時代中期頃から在証される（日国 2000-02）。しかし上二段活用の〈生く〉が上代の文献に在証されない事実は、それが上代中央語に存在しないことを必ずしも意味しない。旧上二段動詞〈生く〉に対応する動詞は日本語諸方言に広く観察されるだけでなく（平山他（編）1992-93）、琉球諸語にも観察される（大和浜方言 *?ik'ir-*、伊江方言 *?itɕ'ir-*、多良間方言 *iki-*、竹富方言 *?ikir-*）。琉球諸語の一部には旧四段動詞〈生く〉に対応する語も確認できるため（伊江方言 *?ik'-*、今帰仁方言 *çik'-*）、琉球祖語には旧上二段動詞と旧四段動詞にそれぞれ対応する動詞が共存していた可能性が高い。分岐年代が上代以前である琉球祖語（Pellard 2015）に旧上二段動詞〈生く〉が再建されることを重視して、この動詞が日琉祖語にまで遡るとみなし、これがU類とM類のいずれに分類できるかを検討しよう。

上代中央語に基づく内的再建の根拠としては、「活き活きとしている・生命と力が永久である、の意で、ほめ詞的に名詞を修飾する」（上代辞 1967: 69）という上代中央語の拘束形態素 *iku* を挙げることができるだろう。この形態素は「活杖」「生太刀」「活玉」「生日」「生弓矢」「生井」等の前部要素に認めることができる（上代辞 1967）。この *iku* については、旧四段動詞〈生く〉の連体形からこれが派生し

⁶ 〈出来〉は大多数の現代九州諸方言で下二段活用する（未然・連用形語幹 *deke*）（原田（編）1979, 1993; 原田 1953; 糸井 1964; 平山・木部（編）1997）。〈出来〉の通時変化は中央語においても複雑であり、近世中央語においてその未然・連用形語幹が *deki* と *deke* の間で揺れる（日国 2000-02）。一部の琉球諸語にも〈出来〉が観察され（伊江方言 *dik'ir-* 「出来る」、首里方言 *dikir-* 「出来る」、多良間方言 *diki-* 「出来る」）、琉球祖語に **deke-* が再建できそうであるが、問題がある。〈出づ〉の琉球祖語形は **ide-* であり（伊江方言 *?izir-* 「出る」、首里方言 *?ndzir-* 「出る」、多良間方言 *idi-* 「出る」）、語頭母音が保持されているが、〈出づ〉と〈来〉からなる複合語である〈出来〉の琉球祖語形 **deke-* には語頭母音が保持されておらず、対応が不規則となる。中央語内部の揺れや琉球諸語との対応の不規則性から、〈出来〉の語史に借用が関与していることが示唆される。

たとする見解もあるが(日国2000-02),その根拠は示されていない。本稿はikuを,旧上二段動詞〈生く〉と語源を同じくする語根における母音交替の事例と解釈する。この交替形における母音が o_2 ではなくuであることに基づいて,日琉祖語の〈生く〉にU類の*ikuiが再建できる。日琉祖語に*ikuiを再建することは,その琉球祖語形は*ike-ではなく*iki-であることを予測する。実際に琉球祖語には*iki-が再建できる(表8)。U類とM類が類推により統合する南琉球諸語は語幹末母音の再建に利用できない。また伊江方言では問題の音環境において*kiと*keが合流するため判断の根拠が見つけれない⁷。しかし大和浜方言には両者の区別があり,問題の音環境で前者はk'i,後者はk'hiに反映されるので⁸,これに基づき琉球祖語形*iki-「生きる」

⁷伊江方言における琉球祖語(pR)の*kiと*keの合流について詳述するように査読者に求められたので,それをここで言う。伊江方言では後述の環境を除いて,pRの*kiはtɕ'iに反映される(pR*kataki「敵」>hat'atɕ'i,pR*toki「時」>tʰutɕ'i,pR*kuki「莖」>gutɕ'i),*keはkiに反映される(pR*patake「畑」>pʰat'ak'i,pR*potoke「仏」>pʰut'uk'i,pR*puke「間引く」>pʰuk'i(-),pR*wekeri「姉妹から見た男の兄弟」>wik'i:)。したがってpRの*kiと*keの区別は母音ではなく先行子音に保持される(3.1節参照)。これに基づき,伊江方言に**逆行的口蓋化**(および破擦化)*k>tɕ/_*iと,年代的にこれに続く**狭母音化***e>iとが再建できる。(他方言との比較から,逆行的口蓋化は*k>*ki>tɕという過程を,狭母音化は*e>*i>iという過程を経た可能性が高いが,ここでの議論には関係しない。)その一方で,*kiと*keに*iが先行する場合は,*kiと*keは等しくtɕ'iに反映され,両者は合流する(pR*iki「息」>ʔitɕ'i,pR*sikiri「ナマコ」>ciɕ'i,pR*ike-「活け」>ʔitɕ'i(-),pR*irike「鱗」>ʔitɕ'i:)。これは北琉球諸語に広く観察される先行音節の*iによる順行的口蓋化(および破擦化)によるものである(注8参照)。この順行的口蓋化は,後続母音がpRの非狭母音の時にのみ生じ(pR*ika「烏賊」>ʔitɕ'a,pR*pikari「光」>tʰitɕ'ai,pR*tikara「力」>tɕʰitɕ'ara,pR*umiko「膿」>ʔuntɕ'u),狭母音の時は生じない(pR*ikusa「戦」>ʔik'usa,pR*ikutu「幾つ」>ʔik'ut'si)。これに基づき,**順行的口蓋化***k>tɕ/_*i_V[-high]が再建できる。逆行的口蓋化も*k>*ki>tɕという過程を経た可能性が高いが,ここでの議論には関係しない。以上から,表8の「息」についてはpR*iki「息」>ʔitɕ'i(逆行的口蓋化),「活け」についてはpR*ike-「活け」>*ʔitɕ'e-(順行的口蓋化)>ʔitɕ'i(-)(狭母音化)という変化の過程が再建できる。

⁸査読者から表8の大和浜方言に再建される音変化の詳細を示すように求められたので,それをここで言う。注5に論じたように大和浜方言では,日琉祖語(pJ)の母音*aiは琉球祖語(pR)*eを経てiに変化するが,ʔik'hi(<pR*ike「池」)とʔik'hi-(<pR*ike-「活け」)ではpR*eがiではなくiに反映されている。この母音がpR*iではなくpR*eの反映とみなせる根拠は直前の子音の帯気化にある。注5に詳述したように,pR*kが帯気化するのは後続母音がpRの非狭母音の場合なので,問題の母音はpR*iの反映ではありえない。後続母音がpR*iの場合,pR*kは喉頭化するが,実際にʔik'i(<pR*iki「息」)とʔik'hi-(<pR*iki-「生き」)では問題の子音が喉頭化している。pR*ikeからʔik'hiへの変化を説明するためには,*iがiへと変化する過程を説明しなければならない。問題の変化の契機として,先行母音*iによる*kの順行的な口蓋化が再建される。大和浜方言における口蓋化はpR*ika「烏賊」>ʔik'ʰa,pR*ikari「錨」>ʔik'ʰariなどに確認できる。pR*ikusa「戦」>ʔik'usa,pR*tikura「鱈」>tɕ'ik'uraには口蓋化が観察されないことから,口蓋化は*kに後続する母音が非狭母音の時に限定されることが明らかになる。仮に口蓋化が帯気化に先行すると仮定すると,**順行的口蓋化**(*k>ki/_*i_V[-high])が再建できる。この変化は,母音に与えられた素性[-back]が後続子音に波及する順行同化として説明できる。同様の順行的口蓋化は北琉球諸語,例えば伊江方言(注7参照)や今帰仁方言(pR*ika「烏賊」>ciɕ'a,pR*pikari「光」>pʰitɕ'ai),首里方言(pR*ika「烏賊」>ʔitɕ'a,pR*pikari「光」>ʰitɕai)に広く観察される。これらの3方言では口蓋化がさらに進んで子音が破擦化している。この口蓋化の後に狭母音化(*e>i)が生じるが,さらにその後には生じる音変化として,口蓋化子音に後続する*iをiに変える**前舌化**(*i>i/_*C_)が再建される。この変化は,口蓋化子音を持つ前舌性[-back]が後続母音に波及する順行同化として説明でき

を再建することができる。したがって琉球祖語との対応からも U 類 *ikui の再建が支持される。

表 8 琉球諸語における旧上二段動詞〈生く〉の対応

	「生き」	「月」	「息」	「池」	「活け」
日琉祖語	*ikui	*tukui	*iki	*ikai	*ikai
上代中央語		tuki ₂	iki ₁	ike ₂	ike ₂ -
大和浜方言	ik'ir-	tz'ik'i	ik'i	ik'hi	ik'hi-
伊江方言	?itɕ'ir-	sitɕ'i:	?itɕ'i		?itɕ'ir-
多良間方言	iki-	tsɰkɰ	ikɰ	iki	iki-
竹富方言	iki-	ɕiki	iki	iki	iki-
琉球祖語	*iki-	*tuki	*iki	*ike	*ike-

6 種類の動詞のうち〈過ぐ〉と〈生く〉を除いた動詞はすべて M 類に属することを示す証拠がある。〈起く〉が M 類に属することはすでに論じた。〈落つ〉の未然・連用語幹末母音が上代中央語で *i* であるか *i*₂ であるかは、歯茎音の直後に *i*₁ と *i*₂ の書き分けがないため知ることができない。しかしこの動詞が上代中央語で上二段活用したことは明らかであり（於知 *oti*「落ち」(万葉集 3647), 於都流 *oturu*「落ちる」(万葉集 3392)), また語根が共通する動詞〈劣る〉に *o*₂ との母音交替が確認できる（於止礼留 *oto₂reru*「劣った」(仏足石歌 13)）。また琉球諸語における対応から、琉球祖語における〈落つ〉の語幹末には **i* ではなく **e* が再建される（表 9）。以上から日琉祖語の〈落つ〉として M 類の **ɔtai* が再建される。

表 9 〈落つ〉の琉球諸語における対応

	「落ち」	「表」	「東風」
琉球祖語	*ote-	*omote	*koti
大和浜方言	ut'hi-	?omot'he	k'butz'i
伊江方言	?ut'ir-	?umut'i	k'butɕ'i
今帰仁方言	ɸut'ir-	?umu:t'i	(aga:ributz'i)
首里方言	?utir-	?umuti	kutɕi

〈下る〉を音仮名で表した上代中央語の記録はない。しかしこの動詞は中古中央語では上二段活用であり（日国 2000-02), この動詞と語根の共通する動詞〈下ろす〉が上代中央語にあり（於呂之 *oro₂si*「下ろし」(万葉集 3603)), *o*₂ との母音交替が確認できる。琉球諸語における対応から、琉球祖語の〈下る〉の語幹末には **i* ではなく **e* を再建することができる（表 10）。したがって日琉祖語の〈下る〉とし

る。以上から, pR **ike* > **?ikie* (順行的口蓋化) > **?ik'he* (帯気化) > **?ik'hi* (狭母音化) > **?ik'i* (前舌化) という変化の過程が再建される。(いま, 声門閉鎖音挿入の年代は問わない。) pR の音連鎖 **ike* が大和浜方言で *ik'hi* に反映される事実は, pR **irike*「鱗」> **irik'hi* にも確認できる。

て M 類の * ɔrɔi が再建される。

表 10 〈^お下る〉の琉球諸語における対応

	「下り」	「汚れ」	「鳥」
琉球祖語	*ore-	*jogore	*tori
大和浜方言	?u \acute{a} ri-	-juguri	t \acute{h} uri
伊江方言	?u \acute{a} ri-	juguri	t \acute{h} ui
今帰仁方言	?u \acute{a} ri-	juguri	t \acute{h} ui
首里方言	?u \acute{a} ri-	juguri	tui

〈^お生ふ〉に関しては上代中央語に語根の共通する動詞〈^お生ほす〉があり、 i_2 と o （甲乙不明）との母音交替が確認できる（於非 opi_2 -「^は生え」（万葉集 3452）～ 於保之 oposi 「^は生やし」（万葉集 4113））。 oposi の母音 o の甲乙が不明であるが、隣接する音節がともに非前舌中段母音を持つ上代中央語の語根の圧倒的多数においてその母音は o_2 であるため、〈^お生ふ〉の日琉祖語形として M 類の * ɔpɔi を再建するのが合理的である（Pellard 2013）。琉球諸語の動詞〈^お生ふ〉に関する資料は乏しいが、Pellard (2013) によると〈^お生ふ〉は湯湾方言 xwi -「大きい」や今帰仁方言 ɸup'i -「大きい」等と同源であり、この形容詞の琉球祖語形の末尾には * e が再建される。したがって M 類の * ɔpɔi を再建する根拠は琉球諸語にも認められる。

以上の議論から本稿は 6 つの旧上二段動詞を (6) のように U 類と M 類とに分類する。

- (6) U 類 〈過ぐ〉 * sugui 〈生く〉 * ikui
 M 類 〈落つ〉 * ɔtai 〈下る〉 * ɔrɔi 〈起く〉 * ɔkɔi 〈生ふ〉 * ɔpɔi

3.4. 服部四郎の九州・琉球祖語仮説における U 類と M 類

前述のように、服部 (1976) は音変化 * $\text{ɔi} > *e$ が琉球諸語だけでなく九州諸方言にも認められ、この音変化の共有によって、琉球諸語と九州諸方言のみからなる単系統群が定義されるとする九州・琉球祖語仮説を提案している。その根拠は何に求められるのだろうか。

服部は現代九州諸方言の旧上二段動詞の語幹末母音に関して以下のように指摘する。

前者 [ote「落ち」] に関しては、九州の肥後・薩隅 [...] や島原・豊後 [...] にも / $\text{ote}/$ が見られる。これは、日本祖語の * ɔi が、奈良朝中央方言では / $\text{i}/$ （甲乙の区別がある場合は「乙」）になったのに対し、八丈、九州、琉球では / $\text{e}/$ になったことを意味する。これは重大である。（服部：1976/2018: 63-64, [] 内筆者）「起きる」に関しては、筑前・豊前・豊後・日向の現代方言に / $\text{oke}/$ という形が見える [...]。（服部 1976/2018: 64）

日琉祖語の *ai は旧上二段動詞の語幹末母音のほかにも名詞 *kai「木」にも再建される (4b)。しかし現代九州諸方言の「木」は ke ではなく ki であり、この名詞に音変化 *ai > *e の証拠を見つけることはできない。これに関連して服部は以下の事実を指摘する。

「木」に関しては、奈良朝の文献に

/ke/ (乙類)《木》豊前、筑後の地名。上総、下野の防人歌。

という例が見える […]。八丈では /ki/ であるけれども […], これは後世になって共通語化された形ではなかろうか。 (服部 1976/2018: 64)

ke₂「木」を含む九州の地名を記録した文献について服部は詳しく述べていないが、その文献とは日本書紀景行紀 12 代、18 代である。いずれの記録においても「木」を含むことがうかがえる豊前および筑後の地名ミケに、ke₂を表す音仮名(概, 開)が与えられていることから、上代以前の豊前・筑後の言語に ke₂「木」が用いられていたことが推測される⁹。

音変化 *ai > *e の共有によって、琉球諸語と九州諸方言からなる単系統群が定義できることを服部が明確に述べた箇所は以下に認められる。

近年九州方言と琉球方言の親近性がますます説かれるようになってきたが、前節で指摘した「オテ -」《落》, 「ケ」《木》, 「オケ -」《起》などは、まず九州方言と中央方言が分岐し、のちに九州方言から琉球方言が分岐したことを示す徴憑と見ることができる。 (服部 1976/2018: 72)

前述の通り、現代九州諸方言に ke「木」は確認できないので、九州諸方言の古い段階に *ke「木」を再建する説を保持するのならば、服部が八丈語に仮定するように、中央語系統の方言(すなわち音変化 *ai > i₂ > i を経験した言語の子孫)との接触によって ke「木」が ki「木」に置き換わったと仮定せざるを得ない。現代九州諸方言に関する限り、音変化 *ai > e の根拠は旧上二段動詞の語幹末母音のみに求められる。

第 2 節で指摘したように、服部の九州・琉球祖語仮説に関する議論には、U 類と M 類の区別を念頭に置いていないという重大な問題がある。服部が例に挙げる ote「落ち」, oke「起き」はいずれも M 類であり、U 類は一切検討されていない。Serafim (2003) も現代九州諸方言(特に九州東部の諸方言)で M 類が旧下二段動詞と統合している事実に基づいて、九州(東部)の諸方言と琉球諸語の近縁性を主張しているが、現代九州諸方言の U 類と M 類の区別を検討していない。もし旧上二段動詞の未然・連用形語幹末音が U 類と M 類の違いにかかわらず一様に e であ

⁹ Pellard (2021) は日本書紀に記録された言語が、現代九州諸方言の直接の祖先とは限らないとして、日本書紀の ke₂ は九州琉球祖語仮説を支持する根拠とはならないと主張する。

るのならば、それは類推変化の結果としても説明できる。

九州・琉球祖語仮説を支持するためには、1) U類の未然・連用形語幹末が*i*であり(〈過ぐ〉*sugi*, 〈生く〉*iki*), 2) M類の未然・連用形語幹末が*e*であり(〈落つ〉*ote*, 〈下る〉*ore*, 〈起く〉*oke*等), 3) M類が旧下二段動詞(〈受く〉*uke*等)と統合している方言を現代九州諸方言に見つけなければならない。

4. U類とM類の区別を持つ九州方言—宮崎県中部方言

U類とM類の区別の観点から九州諸方言における動詞パラダイムを詳細に検討すると、M類のみが旧下二段動詞に統合する体系が宮崎県の諸方言に見つかる。

宮崎県の諸方言は、地域を区分することによって諸方言を分類する方言区画論に基づくと、県の西南部の諸県地方で用いられる「諸県方言」とそれ以外で用いられる「日向方言」とに大別される(岩本1983)。「諸県方言」は鹿児島県(奄美群島を除く)の諸方言が属する薩隅方言の下位区分とされる。岩本(1983)によると、「日向方言」はさらに「中部方言」(旧宮崎郡, 旧宮崎市, 旧児湯郡, 旧西都市), 「北部方言」(旧東臼杵郡, 旧延岡市, 旧日向市, 旧西臼杵郡), 「南部方言」(旧北那賀郡, 旧南那珂郡)に下位区分される。諸県地方の東端に位置する旧東諸県郡の方言は「諸県方言」に区分される一方で、「日向方言」との中間的な言語的特質を示すことが知られている(岩本1983, 合原2012)。

「日向方言」における旧上二段動詞の活用は多様であり、下二段活用(7a), 上一段活用(7b), 未然形のみが「ラ行五段化」した上一段活用(7c)の3種類が行われているという(九州方言学会(編)1969, 岩本1983)。

- (7) 「日向方言」における〈起く〉の活用(九州方言学会(編)1969, 岩本1983)
- | | | | | | | |
|-------------------|----|--------------|----|------------|----|--------------|
| a. 下二段活用 | 未然 | <i>oke</i> | 連用 | <i>oke</i> | 終止 | <i>okuru</i> |
| b. 上一段活用 | 未然 | <i>oki</i> | 連用 | <i>oki</i> | 終止 | <i>okiru</i> |
| c. 「ラ行五段化」した上一段活用 | 未然 | <i>okira</i> | 連用 | <i>oki</i> | 終止 | <i>okiru</i> |

活用の多様性には地域差が指摘されている。岩本(1983)によると(7a)は「中部方言」および「南部方言」に、(7c)は「北部方言」に概して認められるという。また九州方言学会(編)(1969)によると、(7a)は宮崎県中部や海岸寄りの地域に、(7b)はそれ以外の地域に概して分布するという。地域差は図1からも確認できる。さらに比江島(1992)は世代差を指摘しており、(7a)は年輩層、(7b)は若年層に主として認められるという。

方言区画論に基づく資料をM類とU類の区別の有無の検討に用いるのには問題がある。なぜならば、岩本(1983: 90)の「中部方言」の定義に言語的特質が一切用いられていない事実が示唆するように、方言区画論の方言分類は言語的特質よりもむしろ、言語共同体形成に影響を与える行政区分(封建時代の藩の区分等)に概して依拠しているからである。このような枠組みでは、地域や世代によって異なる複数の言語体系は、それらが特定の地理区画に分布する事実に基づいて1つの方言

群に分類される。したがって、たとえU類とM類とを区別する体系が存在していたとしても、それを区別しない体系が同一区画内に混在していれば、U類とM類の区別は見逃され、その区別を示す特質は、単一の体系における活用形の異形態と誤認されうる。U類とM類の区別を検討するためには、広範な地域に分布する方言を概括する資料ではなく、局所的な調査地点が明記された資料を用いる必要がある。

宮崎県の諸方言におけるU類とM類の双方の活用を記述する先行研究に原田(編)(1979)、平山他(編)(1992-93)、および比江島(1992)がある。このうち比江島(1992)はU類の〈過ぐ〉とM類の〈落つ〉〈下る〉〈起く〉とを挙げ、(7)に示した3種類の活用がすべての動詞に認められると報告している。しかし岩本(1983)の方言区画論に則ったこの資料をU類とM類の区別の不在の証拠と認めることは、上に述べた理由からできない。それに対して原田(編)(1979)と平山他(編)(1992-93)は調査地点を明記しており、本稿の目的に適う。以下、この2つの資料に基づいてU類とM類の区別を検討する¹⁰。

原田章之進編集の『宮崎方言辞典』(原田(編)1979)は、数多くの既存資料と編者自身の調査結果とに基づいて宮崎県の諸方言の語彙をまとめた辞典であるが、多くの動詞に活用の情報が付与されている。旧上二段動詞に関してこの辞書はU類(〈過ぐ〉)とM類(〈落つ〉〈下る〉〈起く〉)の双方を記載している(8)。

- (8) 『宮崎方言辞典』(原田(編)1979)によるU類, M類, 旧下二段動詞の活用
a. U類(〈過ぐ〉) すぐつ【上二】過ぎる。程度の過ぎること。「ちっと

¹⁰ 査読者から、筆者自身が宮崎県で調査を行い自説を検証しない理由を説明するように求められた。その理由は、1) 現地調査の長期化が予想されること、2) 現在は本格的な現地調査が不可能な状況下にあること、3) 本稿の内容は現地調査による検証を待たずに公表するに値することにある。現地調査の長期化が予想される根拠は、宮崎県の諸方言の旧上二段動詞パラダイムの近年の変容にある。比江島(1992)の調査時にすでに若年層が旧上二段動詞を上一段活用させることが指摘されていた。調査期間が1979年～1982年の『方言文法全国地図』(GAJ 1989-2006)と調査期間が2010年～2015年の『新日本言語地図』(NLJ)(大西(編)2016)とを比較しても、旧上二段動詞が下二段活用から上一段活用・ラ行五段活用へと変化していく過程が確認できる。(起く)の未然形を例に取ろう。GAJの延岡市牧町はokeであったが、NLJの延岡市はokiraである。GAJの串間市大字西方字松尾はoke, oki, okiraの併用であったが、NLJの串間市はokeを失いokiraのみである。GAJの日南市油津はokeのみであったが、NLJの日南市はokeに加えてoki, okiraを併用している。GAJの東臼杵郡北浦町大字古江はokeのみであったが、NLJの北浦町はokeに加えてokiを併用している。NLJの話者は70歳以上であるので、現在高年層に属している話者達が古い体系を失っていることがわかる。以上から、九州・琉球祖語の体系を保持する話者は極めて少なくなっていると推測される。そのような話者を探し出すには、広範囲の調査地点で複数の話者を対象とした長期的な調査が必要となるだろう。これを2019年末から現在まで続く新型コロナウイルス感染症流行下で行うことは不可能であるため、現地調査は将来的な課題とせざるを得ない。将来の現地調査に先立って本稿を公表することには利点がある。宮崎県の諸方言における動詞パラダイムの現状を鑑みるに、観察される多様性から古い体系を再建するために有益なデータを収集するためには、現地調査の方法を洗練する必要がある。本稿が示す枠組み(動詞のU類とM類への分類など)は、そのような新しい調査方法を開発するための基礎になる。これは独立の課題であり、これに取り組むためには本稿が公表されている必要がある。

- いスグヅ」(少し多すぎるよ) 児湯 - 川南。宮崎市。宮崎郡。東諸県郡。(p.257)
- b. M類〈^お落つ〉
おつる【下二】落ちる。→**おてる**(活用=オテン オテタ オツル オツレバ) 西臼-高千穂。椎葉村。延岡市。日向市。東児湯。西米良村。西都市三財。日南市油津。東諸県郡。都城市。北諸-須木。(p.87)
おてた(句) 落ちた。「海ん中にオテタっかん(おちたのかも)知れん」「川にくずれオテタ」西臼-日之影。椎葉村。延岡市。日向市。東臼-東郷。東児湯。西都市東米良。宮崎市。宮崎郡。日南市。串間市。東諸県郡。えびの市。西諸-須木。(p.88)
おてる 落ちる。→**おつる** 西都市(オツル併)。東諸-国富(p.88)
- c. M類〈^お下る〉
おるる【下二】降りる。→**おれた**。**おれち**「夜霧がオルル」「オルッ人がすんじかり順番に」全県的。(p.99)
おれ-た(句) 降りた。東臼-東郷。宮崎市。東諸-国富。(p.100)
おれ-ち(句) 降りて。「車掌さんがオレチ来て」「電車をオレチかい」東児湯。東諸-高岡。(p.100)
おれ-て(句) 降りて。「車掌さんがオレテ」西都市。児湯-新富。日南市大堂津。東諸県郡。(p.100)
- d. M類〈^お起く〉
おくる【下二】起きる。西臼杵郡、椎葉村を除いてほとんど全県的。起ケン、起ケタ、起クル、起クレバ。(p.76)
おきる 起きる。西臼杵郡、椎葉村。(県内はオクルが大勢)命令形=オキレ。オキランカ(反語的的命令法)。(p.75)
- e. 旧下二段〈^あ開く〉
あくる【下二】あける。明ける。開ける。「夜がアクル」全県的。(p.5)

U類の〈^す過ぐ〉(8a)の項目に「上二」の表記のある“すぐっ”があるので、〈^す過ぐ〉が上二段活用する(未然・連用形 sugi)方言の存在が確認できる。sugiが用いられる地域は児湯郡東部の川南町、旧宮崎郡、旧宮崎市と旧東諸県郡であり、いずれも宮崎県中部に位置する。

M類の〈^お落つ〉(8b)の項目に「下二」の表記のある“おつる”があるので、〈^お落つ〉が下二段活用する方言(未然・連用形 ote)の存在が確認できる。また同項目の“おてた”は、〈^お落つ〉の連用形がoteであることを意味するので、この動詞が下二段活用あるいは下一段活用する方言が存在することがわかる。oteが用いられる地域

に児湯郡東部、旧宮崎郡、旧宮崎市、旧東諸県郡が含まれていることから、sugi を用いる方言はoteを用いることがわかる。

M類の〈下る〉(8c)の項目に「下二」の表記のある“おるる”があるので、〈下る〉が下二段活用する方言(未然・連用形 ore)の存在が確認できる。また同項目に“おれ-た”「降りた」，“おれ-ち”，“おれ-て”があるので、この動詞が下二段活用あるいは下一段活用する方言が存在することがわかる。ore が用いられる地域として名が挙げられているものには児湯郡東部、旧宮崎市、旧東諸県郡が含まれている。旧宮崎郡の名は挙げられていないが，“おるる”が用いられる地域が「全県の」とされていることから、ore が用いられる地域に旧宮崎郡が含まれているとみなせる。以上から、sugi を用いる方言は ore を用いることがわかる。

M類の〈起く〉(8d)の項目に「下二」の表記のある“おくる”があるので、〈起く〉が下二段活用する方言(未然・連用形 oke)の存在が確認できる。下二段活用の“おくる”の用いられる地域には、それが西臼杵郡および椎葉村を除いてほとんど全県的であると記述されているので、児湯郡東部、旧宮崎郡、旧宮崎市、旧東諸県郡が含まれると解釈できる。さらに同項目には、〈起く〉が下二段あるいは下一段活用することを示す“おけた”，“おけん”の記載もあり、これらが用いられる地域として児湯郡東部、旧宮崎郡、旧宮崎市、旧東諸県郡が挙げられている。以上から sugi を用いる方言は oke を用いることが明らかになる。

宮崎県児湯郡東部、旧宮崎郡、旧宮崎市、旧東諸県郡の諸方言を以降「宮崎県中部方言」と呼ぼう。この方言の活用は(9)のように要約できる。

(9) 宮崎県中部方言のU類、M類、旧下二段動詞の未然・連用語幹

U類	〈 ^す 過ぐ〉sugi		
M類	〈 ^お 落つ〉ote	〈 ^お 下る〉ore	〈 ^お 起く〉oke
旧下二段動詞	〈 ^あ 開く〉ake		

宮崎県中部方言においてM類が下二段動詞に統合するがU類はそうではない事実は『現代日本語方言大辞典』(平山他(編)1992-93)からも確認できる。この辞典には宮崎市方言の旧上二段動詞が活用に関する情報とともに記載されており、U類(〈^い生く〉)とM類(〈^お落つ〉〈^お下る〉〈^お起く〉〈^お生ふ〉)の双方の活用を知ることができる(10)。

(10) 『現代日本語方言大辞典』(平山他(編)1992-93)による宮崎市方言のU類、M類、旧下二段動詞の活用

- a. U類〈^い生く〉 **イクル** [ikuru] 【動】 イキン、イキタ、イキマス。(p. 330)
- b. M類〈^お落つ〉 **オツル** [otsuru] 【動】 オチェン、オチェタ、オチェヨル(落ちつつある)。(p. 865)
- c. M類〈^お下る〉 **オルル** [oruru] 【動】 オレン、オレタ、オレヨル(降り

- ている)。 (p. 986)
- d. M類〈^お起く〉 **オクル** [okuru] 【動】 オケン, オケタ, オケチヨル (起きている)。 (p. 784)
- e. M類〈^お生ふ〉 **オエル** [oeru] 【動】 オエラン, オエッタ, オエヨル (生えつつある)。 (p. 3976)
- f. 旧下二段〈^あ開く〉 **アクル** [akuru] 【動】 アケン, アケタ, アケヨル。 (p. 63)
- g. 旧下二段〈^ぬ寝〉 **ニエル** [neru] 【動】 ニエラン, ニエタ, ニエヨル (寝ている)。 (p. 3873)

U類の〈^い生く〉(10a)が上二段活用するのに対して、M類の〈^お落つ〉〈^お下る〉〈^お起く〉(10b-d)は旧下二段動詞〈^あ開く〉(10f)と同様に下二段活用していることから、この方言ではU類とM類とが区別され、M類が下二段動詞に統合していることがわかる。〈^お生ふ〉(10e)は否定接辞および過去接辞を伴う語形において語幹末音節がraである「ラ行五段化」を生じている。しかし進行接辞を伴う語形“オエヨル”では語幹末音が母音eである。この方言では旧下二段動詞の一部(特に〈^ぬ寝〉〈^い出づ〉等の語幹が短いもの)が「一段化」(母音交替の消失)を起こしており、さらに未然形を中心として「ラ行五段化」を起こしている(10g)。したがって〈^お生ふ〉は、旧下二段動詞と統合したのち、〈^ぬ寝〉と同様に一部の活用形を「ラ行五段化」させたと解釈することができる。以上を要約すると(11)のようになり、宮崎市方言ではU類とM類とが区別され、M類が下二段動詞に統合していることが明らかになる。

- (11) 宮崎県宮崎市方言のU類・M類・旧下二段動詞の未然・連用形語幹
- | | | | | |
|------|--------------------|-----------|--------------------|--------------------|
| U類 | 〈 ^い 生く〉 | iki | | |
| M類 | 〈 ^お 落つ〉 | otce | 〈 ^お 下る〉 | ore |
| | 〈 ^お 生ふ〉 | oera (未然) | , oe ~ oet (連用) | |
| 旧下二段 | 〈 ^あ 開く〉 | ake | 〈 ^ぬ 寝〉 | nera (未然), ne (連用) |

以上のように、宮崎県中部方言では琉球祖語と同様にU類とM類とが区別され、M類が下二段動詞に統合している。この非中央語的特質は、琉球諸語と九州諸方言が共有するが古代中央語は共有しない音変化 *i > *eの結果と解釈ことができ、服部が提示しなかった九州・琉球祖語仮説を支持する決定的な証拠となる。

5. U類とM類の区別のない九州諸方言の系統的位置

5.1. 九州・琉球祖語の子孫は宮崎県中部方言だけか?

宮崎県中部方言以外にU類とM類を区別する現代九州諸方言は見つかっていない。服部は、琉球諸語と単系統群を成す現代九州諸方言は「少なくとも九州方言の一部を含む」(服部 1978/2018: 315)と述べ、琉球諸語と単系統群をなすのは現代九州諸方言のすべてか否かに関して慎重な立場を取っている。どの方言群が琉球諸

語と単系統群を成すとみなすことができるのだろうか。現代九州諸方言の中で宮崎県中部方言だけが琉球諸語と単系統群をなすと結論するのは早計である。たとえ琉球諸語と単系統群をなす他の九州諸方言が存在したとしても、二次的な変化が後世に生じれば、その方言は系統を示す特質を失ってしまう。特に活用パラダイムは類推の影響を受けやすいため、その特質は現代まで必ずしも保持されるとは限らない。この問いに答えるためには、変化の起点として古代中央語の体系を置く類推仮説と、九州・琉球祖語の体系を置く九州・琉球祖語仮説のどちらが、現在の活用パラダイムに至るまでの二次的変化を合理的に説明できるかを検討する必要がある。

本節では旧上二段動詞が旧下二段動詞とどのように統合するかに基づいて、(12)の類型を提案し、それぞれの類型が琉球諸語と単系統群を形成するか否かを検討する。

- (12) 旧上二段動詞と旧下二段動詞との統合に基づいた九州諸方言の類型
- a. 類型 A : M 類が旧下二段動詞に統合したが U 類はそうではない方言
 - b. 類型 B : U 類と M 類の双方が旧下二段動詞に統合した方言
 - c. 類型 C : M 類の一部が旧下二段動詞に統合したが U 類はそうではない方言
 - d. 類型 D : U 類と M 類のいずれも旧下二段動詞に統合していない方言

論理的には (12) のほかに、U 類の一部あるいはすべてが旧下二段動詞に統合し、M 類はそうではない類型が想定されるが、この類型に属する方言は見つかっていない。類型 A に属するのは宮崎県中部方言であり、すでにこれを第 4 節で論じた。以下、類型 B、類型 C、類型 D の順で議論を進める。

5.2. 類型 B

類型 B に属する方言には大分県旧野津町西神野方言がある (糸井 1959)。この方言では M 類の〈落つ〉〈下る〉〈起く〉だけでなく U 類の〈過ぐ〉〈生く〉も旧下二段動詞と統合している (13)。この方言にはそもそも上二段活用する動詞が存在しない (糸井 1959)。

- (13) 西神野方言における旧上二段・下二段動詞の未然・連用形語幹 (糸井 1959)

U 類	〈過ぐ〉suge	〈生く〉ike	
M 類	〈落つ〉ote	〈下る〉ore	〈起く〉oke
旧下二段	〈受く〉uke	〈比ぶ〉kurabe	〈始む〉hadime

長崎県壱岐方言も類型 B に属する (山口 1935)。この方言では M 類の〈落つ〉〈下る〉〈起く〉だけでなく U 類の〈過ぐ〉〈生く〉も旧下二段動詞と同じパラダイムに属する (14)¹¹。

¹¹ ただし上二段活用する唯一の旧上二段動詞〈報ゆ〉がある。〈報ゆ〉が用いられない現代九

(14) 壱岐方言における旧上二段・下二段動詞の未然・連用形語幹 (山口 1935)

U類	〈過 ^す ぐ〉suge	〈生 ^い く〉ike	
M類	〈落 ^お つ〉ote	〈下 ^お る〉ore	〈起 ^お く〉oke
旧下二段	〈受 ^う く〉uke	〈植 ^う う〉ue	

類型 B における旧上二段動詞の「下二段化」は、(15) に示すように、古代中央語のパラダイムを起点とした類推仮説によって概念的には単純に説明できる。この仮説が正しければ、類型 B は琉球諸語と単系統群をなさない。

(15) 類推仮説に基づいた類型 B への変化過程 (母音の甲乙は問わない)

	古代中央語	[類推変化]	類型 B
U類 〈過 ^す ぐ〉	sugi	>	suge
U類 〈生 ^い く〉	iki	>	ike
M類 〈落 ^お つ〉	oti	>	ote
M類 〈下 ^お る〉	ori	>	ore
M類 〈起 ^お く〉	oki	>	oke
旧下二段 〈受 ^う く〉	uke	=	uke

しかしながら同時に、M類とU類とが区別された九州・琉球祖語の体系を起点としても、最小限の類推変化を仮定することによって、類型 B への変化過程を説明することができる。(16) に示すように九州・琉球祖語仮説の下で仮定される類推変化は、数の非常に少ないU類の旧下二段動詞への統合に限られる。この仮説が正しければ、類型 B は宮崎県中部方言とともに琉球諸語と単系統群をなす。

(16) 九州・琉球祖語仮説に基づいた類型 B への変化過程

	九州・琉球祖語	[類推変化]	類型 B
U類 〈過 ^す ぐ〉	*sugi	>	suge
U類 〈生 ^い く〉	*iki	>	ike
M類 〈落 ^お つ〉	*ote	=	ote
M類 〈下 ^お る〉	*ore	=	ore
M類 〈起 ^お く〉	*oke	=	oke
旧下二段 〈受 ^う く〉	*uke	=	uke

州方言が報告されていることから(国語調査委員会(編)1906;糸井1959),壱岐方言の〈報^{むく}ゆ〉も伝承語ではない可能性がある。もし〈報^{むく}ゆ〉が伝承語ならば、これがU類かM類かを検討する必要があるが、上代中央語における母音交替の証拠が存在せず、琉球諸語からの証拠も乏しい。しかし上代中央語の音素配列上の制約(有坂1932)を考慮すると、日琉祖語にはU類の*mukujuiないし*mokojuiが再建される可能性が高い。この再建が正しければ壱岐方言の上二段活用の〈報^{むく}ゆ〉はU類とM類の区別の痕跡とみなしうる。

(16)と同様の仮説は Pellard (2013) によって南琉球諸語について提案されている。琉球祖語には U 類と M 類の区別された体系が再建されるが、その再建の根拠は北琉球諸語にしか見つからない (3.1 節)。Pellard (2013: 18, 注 8) は「*ui で終わる多音節動詞語幹は、*si で終わるものとの類推によって再形成された」(筆者訳) と述べており、旧上二段動詞が旧下二段動詞に統合している様相を、琉球祖語では区別された U 類と M 類が南琉球諸語において類推によって二次的に統合した結果とみなしている。類型 B についても同様の通時変化が生じたと仮定することが可能であろう (五十嵐 2021 も参照)。

類推仮説 (15) は、類型 B への変化を類推という単一の要因で説明している点で優れているように思われるが、類推変化の性質を考慮すると必ずしもそうではない。類推変化は、必要な条件を備えた古い形式が 1 項目ずつ新しい形式に置き換わる過程である (Bybee 2015)。したがって古代中央語の体系を起点とした場合、旧上二段動詞の数だけの類推変化を仮定しなければならない (15)。それに対して九州・琉球祖語の体系を起点とした場合、類推変化が仮定される動詞は U 類の動詞のみ (事実上〈過ぐ〉と〈生く〉のみ) となる (16)。したがって仮定される変化の回数がより少ない (最節約的である) という点から、九州・琉球祖語仮説のほうが類推仮説より優れているとみなすことができる。以上から、九州・琉球祖語の子孫の候補から類型 B を排除する積極的な証拠はないと結論できる。

5.3. 類型 D

類型 D では、旧上二段動詞 (U 類・M 類) と旧下二段動詞とが区別されている。変化の起点を古代中央語の体系に置く類推仮説にしたがえば、古代中央語では旧上二段動詞 (U 類・M 類) と旧下二段動詞が区別されているので、類型 D はいわば古い体系を最も忠実に保持している方言ということになる。

類型 D に属する方言は数が極めて少ない。それはほとんどの現代九州諸方言において〈落つ^おつ〉が旧下二段動詞と統合しているためである。旧下二段動詞と統合した〈落つ^おつ〉(未然・連用形語幹 ote) は、大分県九重町 (糸井 1964)、旧大野郡野津町 (糸井 1959、平山他 (編) 1992-93)、宮崎県のほぼ全域 (原田 (編) 1979)、福岡県全域 (加来 1953)、佐賀県旧三養基郡田代村 (国語調査委員会 (編) 1906)、長崎県壱岐 (山口 1935)、対馬 (奥村 1973)、五島列島小値賀、島原半島千々石、旧東彼杵郡川棚、大村市 (原田 (編) 1993)、熊本県熊本市、旧阿蘇郡 (原田 1953)、菊池市 (藤本 2004)、天草諸島 (LAJ 1966-74)、鹿児島県鹿児島市 (平山他 (編) 1992-93)、出水市、旧串木野市、旧市来市、甕島列島 (黒木 2019)、トカラ列島中之島 (平山・木部 (編) 1997) に報告されている。佐賀県の方言における証拠が乏しいが、県単位で見ると ote の存在が確認できない県はない。

〈落つ^おつ〉が旧下二段動詞と統合していない方言には、佐賀県旧杵島郡北方町方言、熊本県八代方言、長崎県長崎市方言 (平山他 (編) 1992-93)、鹿児島県旧串木野市方言 (黒木 2019) があるが、上述のように、串木野市方言に関しては〈落つ^おつ〉が

旧下二段動詞に統合した体系を持つ話者も報告されている。また長崎市方言（平山他（編）1992-93）では〈落つ〉は上二段活用するが、〈生ふ〉が下二段活用する点で類型 D ではなく類型 C に属する。

以上から、類型 D に属する方言は数の上で例外的であり、その地理的分布も有明海・八代海沿岸の九州本土側に限られていることが明らかになる。変化の起点を古代中央語に置く類推仮説を維持するならば、類推による「下二段化」が全く生じていない方言が極めて少なく、また狭い地理的領域に局在している事実を説明する必要があるだろう。

一方、九州・琉球祖語仮説は、M 類と旧下二段動詞とが統合した体系を変化の起点に置くため、一度失われた区別を復活させる変化を仮定せざるを得ない。Labov (1994) が Garde's Principle と呼ぶ「合流は言語的手段によって元に戻すことはできない」という原理にしたがえば、九州・琉球祖語の体系から類型 D を導くためには言語外的要因による変化を仮定しなければならない。そのような要因として最も有力なものは、服部 (1976) が *kai 「木」の反映形に仮定したような中央語系統の方言との接触であろう (3.4 節)。

最節約性の原理を重視すれば、類型 D に関する限り、中央語系統の方言との接触という余計な変化を仮定せざるを得ない九州・琉球祖語仮説ではなく、古代中央語の体系の保持を単純に仮定する仮説が支持されるだろう。しかし類型 D に属する方言が極めて少数であり、それが局所的に分布する事実を考慮すると、接触は特定の地域に分布する方言に 1 度だけ仮定すれば済むので、接触変化を仮定すること自体は九州・琉球祖語仮説に致命的ではない。九州・琉球祖語の子孫の候補から類型 D を排除すべきか否かに答えるためには、九州・琉球祖語仮説が同じく接触による変化を仮定する類型 C を検討する必要がある。

5.4. 類型 C

類推仮説では、類型 C は M 類の一部が類推によって旧下二段動詞に統合したものと解釈される。それに対して九州・琉球祖語仮説では、類型 D の場合と同様に、失われた区別の復活が関与するため、類型 C を導くために中央語系統の方言との接触が仮定される。

類型 C においてどの動詞が下二段動詞に統合するかは方言ごとに異なる。先行研究では指摘されていないが、その方言差には規則性がある。具体的には「変化 X を経験している方言は必ず変化 Y を経験している（逆は真ならず）」という階層構造を有した含意関係が認められる。含意階層は、変化が一定の方向性を持っていることを示唆するため重要である。

(6) に示した M 類のうち〈生ふ〉の活用を報告する研究は少ない。残りの 3 つの M 類〈落つ〉〈下る〉〈起く〉のすべての活用が報告されている研究に基づき、それぞれの方言における「下二段化」の有無を行列の形で表すと表 11 のようになる。

表 11 〈落つ〉〈下る〉〈起く〉の「下二段化」の有無。✓は「下二段化」が生じていることを表す。
長崎市方言は〈生ふ〉に「下二段化」が生じているので類型 C となる。

類型	方言	〈落つ〉	〈下る〉	〈起く〉
D	佐賀県旧杵島郡北方町・熊本県八代市（平山他（編）1992-93）			
C	長崎県長崎市（平山他（編）1992-93）			
C	大分県九重町（糸井 1964），福岡県福岡市（平山他（編）1992-93），熊本県菊池市（藤本 2004），鹿児島県旧串木野市・出水市・旧高城村・旧市来町（黒木 2019），鹿児島市（平山他（編）1992-93）	✓		
C	熊本県天草下島（黒木 2019, LAJ 1966-74） ¹² ，鹿児島県上甕島里・下甕島手打（黒木 2019）	✓	✓	
A/B/C	熊本県阿蘇北部（原田 1953）	✓	✓	✓
B	大分県旧大野郡野津町西神野（糸井 1959），旧大野郡野津町（平山他（編）1992-93），長崎県壱岐（山口 1935）	✓	✓	✓
A	宮崎県宮崎市（原田（編）1979，平山他（編）1992-93），宮崎県児湯郡川南町・旧宮崎郡・旧東諸県郡（原田（編）1979）	✓	✓	✓

この含意階層の解釈は、類推仮説を取るか九州・琉球祖語仮説を取るかで異なる。類推仮説では、すべての M 類が上二段活用する体系が起点となるので、M 類が下二段活用になる「下二段化」が問題となり、「下二段化」が〈落つ〉、〈下る〉、〈起く〉の順序で生じたと解釈される。それに対して九州・琉球祖語仮説では、すべての M 類が下二段活用する体系が起点となるので、M 類が「脱下二段化」する変化が問題となり、「脱下二段化」が〈起く〉、〈下る〉、〈落つ〉の順序で生じたと解釈される。

類推による下二段化仮説と接触による脱下二段化仮説のどちらが優れているかを評価するためには、それぞれの変化が仮定される方言の地理的分布を検討することが有用である。下二段化であれ、脱下二段化であれ、同一の変化が不連続な地域で生じているのならば、同一の変化が独立に複数回、すなわち並行的に生じたと仮定しなければならない。重要なことに、含意階層が示唆する変化の方向性には必然性が認められないため、この変化は偶発的である可能性が高い。偶発的な変化が並行的に生じる可能性は極めて低いため、それを仮定する仮説は棄却することができる。

類推による下二段化仮説に従えば、〈下る〉の「下二段化」は、九州東部に加えて、それとは地理的に不連続な壱岐、天草諸島、甕島列島に並行的に生じたことになる。同様に、〈起く〉の「下二段化」は、九州東部に加えて、それとは地理的に不連続

¹² 黒木（2019）は天草下島西北部の荅北町と同南東部の牛深市深海には〈落つ〉が確認されないとするが、『方言文法全国地図』（LAJ 1966-74）第 95 図「雷が落ちる」によると、天草下島中部の旧本渡市宮地岳町中岳に oterasu が、その北の通詞島に oteru, oterasu が見つかるため、天草下島の〈落つ〉は旧下二段動詞と統合しているとみなせるだろう。

な天草諸島、甌島列島に並行的に生じたことになる。類推による下二段化仮説が並行変化を仮定せざるを得ないことは図1からも確認できる。第2節でも指摘したように、〈起く〉に生じた「下二段化」は九州東部に加えて、壱岐、対馬、天草諸島、甌島列島、トカラ列島に不連続な形で分布している。以上のように、類推による下二段化仮説は、方向性を有する偶発的な一連の変化が独立に複数回生じていることを仮定せざるを得ず、受け入れがたい。

それに対して接触による脱下二段化仮説に従えば、〈起く〉の「脱下二段化」は九州西部、南部、島嶼部を除いた北部、〈下る〉の「脱下二段化」は九州の西部、島嶼部を除いた南部、島嶼部を除いた北部、〈落つ〉の「脱下二段化」は有明海・八代海沿岸の九州本土側という、いずれも地理的に連続した地域に生じたことになる。この様相は、九州西部を起点として北部および南部へと伝播する3回の変化の波と解釈できる。第1波は〈起く〉の「脱下二段化」であり、西部から見て周辺に位置する地域を残して広範な領域へと伝播した。第2波は〈下る〉の「脱下二段化」であり、〈起く〉の変化の場合よりやや狭い領域へと伝播した。第3波は〈落つ〉の「脱下二段化」であり、その伝播は西部の近隣にとどまった。

以上のように、並行変化を仮定せざるを得ない類推仮説より、U類とM類とが区別された体系を起点とする九州・琉球祖語仮説のほうが類型Cに生じた二次的变化をより合理的に説明できる¹³。九州・琉球祖語仮説の下では、類型Dは中央語系統の方言との接触が最も激しい地域で生じた体系であると解釈できるだろう。したがって九州・琉球祖語の子孫の候補から類型Cと類型Dとを排除する積極的な証拠はないと結論できる。九州・琉球祖語仮説は、九州における中央語系統の方言話者との最も緊密な交流が西部で行われたという歴史を仮定していることになるが、この仮定が妥当であるか否かは今後の研究に俟つほかない。

6. 結論

音変化の共有によって九州諸方言と琉球諸語からなる単系統群が定義されるという服部(1976)の九州・琉球祖語仮説を支持する確実な証拠はこれまで提出されてこなかった。本稿はこの仮説を支持する証拠が宮崎県中部の方言に認められることを示すとともに、その他の現代九州諸方言も九州・琉球祖語の子孫とみなしうることを論じた。本稿は、これまで語彙・文法の共通性から検討されてきた九州諸方言

¹³「脱下二段化」の要因となった中央語系統の諸方言との接触はいつ行われたのだろうか。18世紀の鹿児島方言を記述したロシア資料の検討(迫野1998b;久保蘭2013)によると、〈落つ〉は下二段活用するが、〈下る〉〈起く〉は上一段活用するという。現代の鹿児島県の諸方言の大部分では〈下る〉〈起く〉が「ラ行五段化」しているが(平山他(編)1992-93;黒木2019)、「脱下二段化」の観点からは〈下る〉〈起く〉は「脱下二段化」しているのに対して〈落つ〉はそうではないと言える。この点でロシア資料の鹿児島方言と現代の鹿児島県の諸方言は一致する。以上から九州諸方言に「脱下二段化」をもたらした中央語系統の諸方言との接触は18世紀以前から生じていたことが明らかになる。

と琉球諸語との系統的近縁性に音変化の共有という比較言語学的証拠を与えるものである。日琉祖語が琉球語派と、中央語と九州諸方言を含む日本語本土諸方言からなる日本語派とに分岐する系統樹 (Pellard 2015) が現在広く受け入れられているが、この通説は抜本的に再検討する必要があるだろう。

参考文献

- 有坂秀世 (1931) 「国語にあらはれる一種の母音交替について」『音声の研究』4: 89-137.
- 有坂秀世 (1932) 「古事記に於けるモの仮名の用法について」『国語と国文学』9(11): 74-93.
- Bybee, Joan (2015) *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤本憲信 (2004) 『熊本県菊池方言辞典』熊本: 熊日出版.
- GAJ (1989-2006) = 国立国語研究所 (編) (1989-2006) 『方言文法全国地図』全6巻, 東京: 財務省印刷局. (電子版: 国立国語研究所 (2021) 「方言文法全国地図 全データ」https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj_all/gaj_all.html [2021年7月17日アクセス])
- 合原加奈美 (2012) 「宮崎県東諸の方言について」『語文論叢』27: 69-46.
- 原田芳起 (1953) 『熊本方言の研究』熊本: 日本談義社.
- 原田章之進 (編) (1979) 『宮崎県方言辞典』東京: 風間書房.
- 原田章之進 (編) (1993) 『長崎県方言辞典』東京: 風間書房.
- 原田走一郎 (2016) 「南琉球八重山黒島方言の文法」博士論文, 大阪大学.
- 服部四郎 (1976) 「琉球方言と本土方言」伊波普猷先生誕百年記念会 (編) 『沖縄学の黎明: 伊波普猷先生百年記念誌』沖縄: 沖縄文化協会. (服部 (2018), 45-81 に再掲).
- 服部四郎 (1978) 「日本祖語について (8-9)」『月刊言語』7 (10-11) (服部 (2018), 170-192 に再掲.)
- 服部四郎 (2018) 『日本祖語の再建』東京: 岩波書店.
- 早田輝洋 (2017) 『上代日本語の音韻』東京: 岩波書店.
- 比江島修一 (1992) 「宮崎県の方言」宮崎県 (編) 『宮崎県史資料編民俗2』1100-1150. 宮崎: 宮崎県.
- 彦坂佳宜 (2001) 「九州方言における活用型統合の模様とその経緯: 『方言文法地図』九州地域の解釈」『日本語科学』9: 101-122.
- 平山輝男・木部暢子 (編) (1997) 『鹿児島県のことば: 日本のことばシリーズ 46』東京: 明治書院.
- 平山輝男・大野真男・久野マリ子・大島一郎・久野真・杉村孝夫 (編) (1992-93) 『現代日本語方言大辞典 (1-6)』東京: 明治書院.
- 五十嵐陽介 (2018) 「九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか?: 共通改新としての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築」鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとモノの移動」, 鹿児島: 鹿児島大学.
- 五十嵐陽介 (2021) 「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」林由華・衣畑智英・木部暢子 (編) 『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』17-51. 東京: 開拓社.
- 伊波普猷 (1911) 「琉球人の祖先に就いて」伊波普猷『古琉球』1-60. 沖縄: 沖縄公論社.
- 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) (1999a) 『日本列島方言叢書 24 九州方言考 ②福岡県・佐賀県』東京: ゆまに書房.
- 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) (1999b) 『日本列島方言叢書 25 九州方言考 ③長崎県』東京: ゆまに書房.
- 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編) (1999c) 『日本列島方言叢書 26 九州方言考 ④熊本県・大分県・宮崎県』東京: ゆまに書房.
- 糸井寛一 (1959) 「南豊後山村方言における動詞の活用体系」『大分大学学芸学部研究紀要』1(9): 67-94.
- 糸井寛一 (1964) 「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要』2(4) (井上他 (1999c), 130-157 に再掲).
- 岩本実 (1983) 「宮崎県の方言」日野資純・飯豊毅一・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 9—九州地方の方言』, 267-293. 東京: 国書刊行会.
- Jarosz, Aleksandra (2019) Non-core vocabulary cognates in Ryukyuan and Kyushu. Hayato Aoi (ed.)

Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia, 8–29. Tokyo: ILCAA.

- 上代辞 (1967) = 上代語辞典編集委員会 (編) (1967) 『時代別国語大辞典上代編』東京:三省堂。
- 加来敬一 (1953) 「福岡県方言の語法」北九州地区高等学校国漢部会 (編) 『北九州国文』(井上他 (1999a), 301–329 に再掲)。
- 狩俣繁久 (2020) 「琉球語の起源はどのように語られたか: 琉球語と九州方言の関係を問う」長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望: 日本語の起源はどのように論じられてきたか』227–249. 東京:三省堂。
- 小林隆 (1994) 「活用の方言分布と歴史: 『方言文法全国地図』の「起きる」について」小野米一 (編) 『ことばの世界: 北海道方言研究会20周年記念論文集』307–326. 北海道: 北海道方言研究会。
- 国語調査委員会 (編) (1906) 『口語法調査報告書 (下)』東京: 国定教科書共同販売所。
- 国立国語研究所 (編) (2001) 『沖縄語辞典』東京: 財務省印刷局。
- 久保蘭愛 (2013) 「ロシア資料の動詞の活用」『文献探求』51: 7–18。
- 黒木邦彦 (2019) 「動詞語幹交替より紐解く九州方言のラ行五段化」窪蘭晴夫・木部暢子・高木千恵 (編) 『鹿児島県甌島方言からみる文法の諸相』273–289. 東京: くろしお出版。
- 九州方言学会 (編) (1969) 『九州方言の基礎的研究』東京: 風間書房。
- Labov, William (1994) *Principles of linguistic change: Internal factors*. Oxford: Blackwell.
- LAJ (1966–74) = 国立国語研究所 (編) (1966–74) 『日本言語地図』全6巻. 東京: 大蔵省印刷局。
- Lawrence, Wayne (2000) 「子音を超えて起こる母音の融合: 琉球諸方言における現象を中心に」『音声研究』4(1): 55–60。
- 前新透 (2011) 『竹富方言辞典』沖縄: 南山舎。
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄: 沖縄タイムズ社。
- 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』東京: 角川学芸出版。
- 日国 (2000–02) = 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) (2000–02) 『日本国語大辞典: 第二版』東京: 小学館。
- 日本語学会 (編) (2018) 『日本語学大辞典』東京: 東京堂出版。
- 野原三義 (1979–83) 「琉球方言と九州諸方言との比較 (I–V)」『沖縄国際大学文学部紀要: 国文学篇』8(1): 1–16; 9(1–2): 1–20; 10(1): 1–16; 11(1–2): 1–16; 12(2): A1–A14。
- 奥村三雄 (1973) 「対馬方言の性格」『九州文化史研究所紀要』18 (井上他 (1999b), 22–66 に再掲)。
- 大西拓一郎 (2002) 「活用」大西拓一郎 (編) 『方言文法調査ガイドブック』151–167. 東京: 国立国語研究所。
- 大西拓一郎 (編) (2016) 『新日本言語地図』東京: 朝倉書店。
- ONCOJ (2021) = Oxford NINJAL Corpus of Old Japanese. <https://oncoj.ninjal.ac.jp/> [accessed June 17, 2021].
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (1980) 『奄美方言分類辞典 (下巻)』東京: 笠間書院。
- Pellard, Thomas (2013) *Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system*. Bjarke Frellesvig and Peter Sells (ed.) *Japanese/Korean Linguistics 20*, 81–96. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Pellard, Thomas (2015) *The linguistic archeology of the Ryukyu Islands*. Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 14–37. Berlin: DeGruyter Mouton.
- Pellard, Thomas (2021) 「日琉諸語の系統分類と分岐について」林由華・衣畑智英・木部暢子 (編) 『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』2–16. 東京: 開拓社。
- 追野虔徳 (1998a) 「九州方言の動詞の活用」『語文研究』85: 1–11。
- 追野虔徳 (1998b) 『文献方言史研究』大阪: 清文堂出版。
- Serafim, Leon A. (2003) *When and from where did the Japonic Language enter the Ryukyus? - A critical comparison of language, archeology, and history. Perspectives on the Origins of the Japanese Language 31: 463–476.*
- Spencer, Andrew (1996) *Phonology: Theory and description*. Oxford: Blackwell Publishers.
- 渡久山春英・セリックケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』東京: 国立国語研究所。
- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムズ社。
- 坪井美樹 (2007) 『日本語活用体系の変遷 増訂版』東京: 笠間書院。
- Vovin, Alexander (2011) *On one more source of Old Japanese i2*, *Journal of East Asian Linguistics 20:*

219–228.

山口麻太郎 (1935) 「宍岐方言の動詞法・助動詞法」『国語と国文学』12(9) (井上他 (1999b), 117–136 に再掲).

執筆者連絡先：

国立国語研究所

e-mail: y.igarashi[at]ninjal.ac.jp

[受領日 2021年7月23日

最終原稿受理日 2022年1月11日]

Abstract

Does “shimo-nidanka” in Upper Bigrade Verbs in Modern Kyushu Dialects Support the Proto-Kyushu-Ryukyuan Hypothesis?

YOSUKE IGARASHI

National Institute for Japanese Language and Linguistics

In modern Kyushu dialects, so-called “*shimo-nidanka*” (a change to lower bigrade conjugation) is observed, in which the final vowel of irrealis/conjunctive (*mizen/ren'yō*) stems of former upper bigrade (*kami-nidan*) verbs takes /e/ and accordingly merge with former lower bigrade (*shimo-nidan*) verbs. According to the proto-Kyushu-Ryukyuan hypothesis, this trait is the result of sound changes experienced by both Kyushu dialects and Ryukyuan, and these shared sound changes define the monophyletic group consisting of the aforementioned. However, there is still a possibility that “*shimo-nidanka*” is a result of analogical changes rather than sound changes. This study examines the validity of the proto-Kyushu-Ryukyuan hypothesis by analyzing the former upper bigrade verbs in modern Kyushu dialects from the perspective of their phylogenetic position. There is evidence to support this hypothesis in the dialects of central Miyazaki Prefecture. This study also argues that other modern Kyushu dialects can also be seen as descendants of the proto-Kyushu-Ryukyuan.